

高

校生の時、友人に勧められて桑原武夫の『文学入門』を読んだ。古本屋で年季が入ったのを数十円で買った。たいして理解もできなかっただろうから、今思い返してもどんなことが書いてあったのかよく思い出せないのだが、巻末の推薦図書リスト「世界近代文学五十選」は、繰り返し見たので、今でもだいたい覚えてる。なぜだかここに挙げられている本は読んでおかなくてはならないのだ、と思い込んでしまっ、差し支えなさそうな授業の時は、引き出しにしのばせてまで読んだ。当然差し支えた。それでも一冊、また一冊、とリストに既読の印を付けてく、構わず読み進めた。

リストの大部分が岩波文庫の赤帯だった。そもそも『文学入門』そのものが戦後それほど時を置かず出版されたものなので、リストに挙げられている本もそれより古いものばかりだった。本は新しくても、中身は大家の文語調の翻訳というのがけっこうあって、読み進めるのに難儀した。

とにかく読了することが目的なので、読んでわかる、味わう、感動するなど二の次である。活字を追いつながら頭の中では別のことを考えている、などしょっちゅうだった。それに気づくと、元に戻ったものか一時迷うのだが、たいていはええいままよと先に進む。

ヴィクトル・ユーゴーの『レミゼラブル』など今の改訳版と違って、冊数も多かったと記憶するが、ただ文字を追うだけで数冊分は読んだ、いや見た。

リストの全作読破はできなかったけれど、それでも何年かかけて相当数手にした。もちろん理解などほとんど遠い。だから仮に聞かれても、読みましたなどとも言えない。

この意図地なだけの、意味に乏しい読書体験で屈折した多くの読書欲は、その後長く長く「近代文学五十選」から遠ざかることになる。

ところが、退職して時間ができてみると、「やつぱり読んじよかんといけん」という気がしてきたから不思議だ。四十年経って、昔ないがしろにした名作たちをていねいに読んで、詫びを入れたくなったのかもしれない。それに、ここ数十年で光文社の古典新訳文庫をはじめ、多くの出版社から意欲的な新訳が次々と出版されていて、環境がうんと整って来たことも大きい。シェイクスピアの諸作、トルストイの『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』、どれもこれもこの一年でようやく読んだ。すばらしくおもしろかった。若いうちに読んでおけ、など決して言うまい。名作は、いくつで読んでもおもしろいから名作なのだ。



専業ババ奮闘記 (その2) 93

木幡智恵美

職場復帰 (3)

義母が再入院した日、同意書を持って夫が行くと、主治医から、「浮腫がひどく、溜まった水が肺を圧迫しているために、血中酸素濃度が低くなっていると思われます」と言われたという。家では血中酸素を測ることなどできない。ショートステイ様だ。

翌日、託児所で宗矢を、保育所で寛大と実歩を迎えて我が家に連れて帰り、夕食を食べさせていると、仕事を終えた娘がやってきた。コロナ三波により病院での面会ができないので、職場復帰したばかりの娘のおばあちゃん情報が頼りだ。息子も帰ってきて、一緒に様子を聞く。「話ができるけど、かなりやばいね」と言う。病院に勤めて十数年、たくさんの患者さんを見てきている娘が言うので確かだろう。「転院はあつても、ショートステイに戻ることはないと思うよ」と付け加えた。

娘の言葉が現実になった。病院から連絡が入ったのは、その二日後。「ばあさん、急変したらしい。すぐ行こう」と言う夫に、「雄二、仕事もう終わってる頃だから、帰ってきたら一緒に病院へ向かうわ」と返し、すぐにメールを入れた。

息子の車に乗り込み、病院に向かう。病室に入ると、義母は酸素マスクを付け、大きな息をしていた。夫だけでなく、娘もいて、「昼休みに寄った時は、みんな元気かいねって言うってたけどねえ」と呟く。息子が義母の手を取り、「ばあちゃん、ばあちゃん」と言うが、目は閉じたまま、息を深く吸い込んでいるばかりだ。と、息子は、「兄貴に連絡する」と、長男にラインを入れた。研修中だったにも関わらず、ラインを返してきた長男に、スマホで義母を写して見せる。スマホから「ばあちゃん、ばあちゃん」と呼ぶ長男の声が聞こえてくる。義母に一番可愛がってもらった長男は、飛んで帰りたい思っだろう。

師長から言われて一旦帰り、再び電話がかかったのは十一時過ぎだった。「こと切れたらしい」という夫と二人で向かった。大きく打っていた胸はもう動いていなかった。死亡確認に主治医が来られたのは日付が変わってからだが、実際は入院後三日目のこと。長く苦しまなかったことが救いだ。義姉と姪もやってきて、義母の顔を眺める。「こんなに綺麗なお母さんの顔、初めて見たわ」と義姉。私も同じことを思っていた。

30代フリーター やあ、ジイさん。ロシアのウクライナ侵略が始まって間もないころ、プーチンの精神状態に異変が起きているのではないかという指摘があった。年金生活者 もしそうだとすれば、私なら強迫性障害を疑う。プーチンはマクロンとの会談で、コロナ感染防止のためとして何メートルも離れて座っていた。これは強迫性障害の特徴のひとつである。「不潔恐怖」のあらわれのように見える。

そう考えたのは私自身に強迫性障害の傾向があるからだ。家を出たあと、エアコンの電源を切ったか気になって引き返したり、書いた書類が間違っていないか何度も読み返したりすることがある。

その背後にあるのは、この世界の仕組みがよくわからないという不安の強さだ。だから、世界の掟に寸分たがわず従おうとして「確認行為」を繰り返してしまふ。

30代 プーチンがそんなことをしてい

るといふ情報でもあるのか。

年金 彼がKGBの仕事に就いたのは、世界の隠された仕組みをすみずみまで知りたいという衝動があったからではないか。つまり世界がよくわからないという不安を人一倍抱えていたことが考えられる。

「不潔恐怖」にしろ、「確認行為」にしろ、共通しているのは、世界がわからないことから来る不安を解消しようとして「過剰な行動」をとってしまふことだ。ウクライナからもNATOからも攻められそうになっているわけでもないのに戦争を始めたプーチンの振る舞い方は、そうした「過剰な行動」の最たるものということができ

る。30代 強迫性障害は好戦的であるかのように聞こえ、患者を傷つけかねないぞ。

年金 プーチンがウクライナに戦争を仕掛けた最大の理由はナシヨナリズムをあおって、自らの独裁体制の危機を突破することにあつた。ウクライナも

NATOもロシアを攻める気がなかったのが明瞭である以上、そう理解するのがいちばん納得しやすい。

それでも疑問は残る。その危機は戦争という膨大な代償を払わなければ超えられないほどのものなのかという疑問だ。現在の世界で独裁体制の危機を乗り越えるために内戦を続けている国はあつても、ロシアのようにあからさまな侵略戦争を始めた国はない。

強迫性障害の特徴である「過剰な行動」のひとつが、プーチンの場合はいろんなめぐりあわせでウクライナ侵略戦争となつた考えられる。

30代 戦争はプーチン個人の事情だけでは始められないはずだ。

年金 国家の事情があつたと考えなければならぬ。それはロシアが「帝国」の伝統をいまなお保持していることだ。帝国は他国を独立した国家としてではなく、自国に従属する臣下のよ

うに扱う。それによって形成されるピラミッドが帝国の統治の骨組みとなる。

える。

日本の歴史を中国という「帝国」の「辺境」の歴史として見ると、「帝国」に過剰に忠実であるうとしたり、その反動で過剰に逆らおうとしたりしてきた経緯を理解しやすい。朱子学が江戸幕府の官学となつたことは「過剰な忠実」の象徴であり、近代の中国侵略は「過剰な反抗」の噴出だつた。

「帝国」の難解な文明がいつも不意打ちのように流れ込んで来る。よく理解できないから、とにかく寸分たがわず真似をしようとする。その繰り返し

が「過剰な忠実」を強いたと言える。

江戸時代には大ざっぱな時間感覚しかなかった日本人が、明治になって西洋から鉄道が導入されると、世界でも有数の時間厳守の国民になつたのはその一例だ。

「過剰な反抗」の大本にあるのも「過剰な忠実」の場合と同様、やはり流入する文明の難解さだ。わかりにくさはときとして得体の知れなさとして感じられるようになり、それが「過剰な猜疑心」を招き、「過剰な反抗」となつてあらわれる。

ロシアが西欧の「辺境」の地位にあつたと言つたのは、18〜19世紀のロシア貴族がフランス語を話していたことなどを指す。この「過剰な忠実」はその反動として「過剰な反抗」「過剰な猜疑心」を育てたはずだ。ウクライナに「中立化」「非武装化」「非ナチ化」といった「過剰な要求」を突きつけ、拒まれると武力に訴えたロシアの振る舞い方にそれを感じないわけにはいかない。

どこか臣下の国家がそこから抜ければ、ピラミッドはぐらつき、帝国の統治は危うくなる。ロシアにとってウクライナはピラミッドから抜けかけた国家に相当する。民主化を進め、対等な関係にある主権国家群の一員として振る舞い始めたからだ。

世界のシステムが「帝国」ではなく、主権国家を単位としている現在、ロシアもウクライナと同じ道を行けば、今より豊かになるはずなのに、「帝国」意識がそれを妨げている。それは身の丈に合わない「過剰な意識」であり、それが戦争という「過剰な行動」を導く一因となつた。

30代 「帝国」といえば、中国だつてそうだった。

年金 違いは中国が「世界帝国」だったのに対し、ロシアは「地域帝国」だったことだ。さらにロシアは「帝国」でありながら、文明において西欧の「辺境」のような地位にあつた。プーチンの侵略戦争にはそのハンディキャップが影を落としているように見

ニュース日記 825  
中村 礼治

## プーチンの事情と ロシアの事情